

ロラン・バルト展に寄せて

駒場の美博新時代へ

今橋 映子



を「日本語で」読む楽しみも再び到来しそうだ。

今回の展覧会で、バルトのデッサンの実物に初めて対面した時印象深かったのは、グアッシュであれ水彩であれ、色彩の鮮やかさと交響、そして軽やかさだ。それはたまたま私がこの二年ほど、詩人アンリ・ミシヨのメスカリン服用実験後の暗鬱なデッサンなどに、研究上付き合ってきたために、余計そう思ったのかも知れない。バルトのデッサンはむしろ、作家、ヘンリー・ミラーの躍るような色彩の交響に比せられるべきだろう。ただ、ミシヨやミラーにとって絵画行為は、ほとんど執筆活動と同等の意味をもっていたわけだが、「アマチュアの、愛する人の喜びの躍動」(松浦氏)とも称すべきバルトのデッサンを、果して同じようなスタンスで論ずるべきなのだろうか。私にはわからない。むしろ会場で私が感じたのは、駒場の美博で、こつたひそやかな歓びの時間を過せる幸福そのものだと言った方が良いかも知れない。

京大仏学院、関西日仏学院、旧教務課建物全面改装の上、リニューアル・オープンした。改装記念特別展は「色の音楽・手の幸福」

ロラン・バルトのデッサン展(十一月二十七日、十二月二十五日)である。小林康夫教授の奔走と美術スタッフおよび関係者の多大な御努力の末に実現したこの展覧会は、総入館者数二二三七人、カタログの売上げも四百冊を超え、テレビ、雑誌媒体でも度々取り上げられた。大学美術館の展覧会としては、まず大成功と言っても良い。



ロラン・バルト(二〇〇三年十二月)
○松浦寿輝「ロラン・バルトの現在」(『UP』二〇〇四年一月号、東京大学出版会)
昨年末からはみずす書房より、『ロラン・バルト著 作集』全十巻も、全くの新訳で刊行され始め、バルト

駒場の瞑想空間—新しく改装された美博の展示室を、私はこの所會う人ごとにご紹介している。旧教務課時代一、二階に仕切り、展示室に二步入ると格子とアーチで構築された美しい天井を見上げることが出来る。窓は全て遮光されてはいるが、それがかえって瞑想する空間の質を高めているように思える。旧高時代の建築物が、実にこれほど美しく蘇ったことには、私のような建築の素人には、そして院生時代から数えればこの二十年ほどの駒場を知る者には、驚異的な変化なのである。この大展示室の中では、美博の名品デュシャンの「大ガラス」もさほど大きく感じない程度だ。とはいえフロアは仕切りで区切られるため、全く異なる二つの展覧会を並行させることも可能だろう。もちろんこの程度の設備をもつ美術館や博物館は、全国至る所にあるだろう。私が貴重だと思つるのは、こうした瞑想空間が駒場キャンパスに存在すること自体なのだ。おせう(こ)は、駒場図書館(実はこ)にも瞑想できる「片隅」が意外とある。や、オルガン演奏会が開かれる九百番教室と共に、誰にとつても、普段の授業や研究とは全く異次元にたちまち入り込むことのできる「隠れ家」になつてくれるに違いない。

それは同時に美博は、駒場の研究教育を敏感に反映する、あるいは大いに触発する媒体に、ますますなっていくだろう。それはバルト展で十分に予感された。日本の経済状況のありをを受けて、多くの美術館や博物館が、マスコミとタイアップの一般向け企画展に頼らざるを得ない中、収益に(一応)関係なく、学問的成果と直結する展覧会が出来る小さなスペースは有難い(もちろん展覧会運営資金の捻出という頭の痛い問題は常につきまとうが……)。バルト展の場合も、内外のバルト研究の進展を受けて、二日間の盛大なバルト国際シンポジウム(十一月二九・三〇日)とも直接リンクしていた。さらにもう一つ、COE関係の事業(「テクストとイメージの共生」

十一月にアンヌ・マリ・クリスタン・パリ第七大学教授の大学院セミナーおよびシンポジウム開催)もゆるやかにこの展覧会につながっていたのだが、「書くことと描くこと」の問題系に、私たちの院ゼミは集中した何ヶ月かを過ごしたのである。この展覧会については、学部の語学の授業でも宣伝

したが、心で展示室に入る。いつも教室とは違ふ眼差しで作品を見入っている。クラスの学生さんご自身が、にっこりするよつな日常も、駒場では何だかとても貴重なもののように思えてしまふ。

新しい美博では今後自然科学博物館との協力を深め、さらには駒場近隣にある別の美術館との連携も模索中である。世に言う「箱もの行政」にならず、この美しい瞑想空間を同時にいかに活力ある文化発信の場にしていくのか—それは、これからの私たち次第なのである。

(超域文化/仏語)

